

寶鏡三昧

如是之法、佛祖密附、汝今得之、宜能保護。
銀盃盛雪、明月藏鷺、類而不齊、混則知處。
意不在言、來機亦赴、動成窠臼、差落顧佇。
背觸共非、如火聚、但形文彩、即屬染汚。
夜半正明、天曉不露、爲物作則、用拔諸苦。
雖非有爲、不是無語、如臨寶鏡、形影相覩。
汝是非渠、渠正是汝、如世嬰兒、五相完具。
不去不來、不起不住、婆婆和和、有句無句。
終不得物、語未正故、重離六爻、偏正回互。
疊而成三、變盡爲五、如莖艸味、如金剛杵。
正中妙挾、敲唱雙舉、通宗通途、挾帶挾路。
錯然則吉、不可犯忤、天真而妙、不屬迷悟。
因緣時節、寂然照著、細入無間、大絕方所。
毫忽之差、不應律呂、今有頓漸、緣立宗趣。
宗趣分矣、即是規矩、宗通趣極、眞常流注。
外寂內搖、繫駒伏鼠、先聖悲之、爲法檀度。
隨其顛倒、以緇爲素、顛倒想滅、肯心自許。
要合古轍、請觀前古、佛道垂成、十劫觀樹。
如虎之缺、如馬之鼻、以有下劣、羈几珍御。
以有驚異、驚奴白牯、羿以巧力、射中百步。
箭鋒相值、巧力何預、木人方歌、石女起舞。
非情識到、寧容思慮、臣奉於君、子順於父。
不順不孝、不奉非輔、潛行密用、如愚如魯。
只能相續、名主中主。

如是の法、佛祖密に附す、汝今之を得たり、宜しく能く保護すべし。
銀盃に雪を盛り、明月に鷺を藏す、類して齊しからず、混ずるときんば處を知る。
意言に在ざれば、來機亦赴く、動ずれば窠臼を成し、差ば顧佇に落つ。
背觸共に非なり、大火聚の如し、但文彩に形せば、即ち染汚に屬す。
夜半正明、天曉不露、物の爲に則と作る、用いて諸苦抜く。
有爲に非ずと雖も、是れ語無きにあらず、寶鏡に臨んで形影相覩るが如し。

汝是れ渠に非ず、渠正に是れ汝、世の嬰兒の五相完具するが如し。
不去不來、不起不住、婆婆和和、有句無句。
終に物を得ず、語未だ正しからざるが故に、重離六爻、偏正回互。
疊んで三と成り、變じ盡きて五と爲る、莖艸の味の如く、金剛の杵の如し。
正中妙挾、敲唱雙び擧ぐ、宗に通じ途に通ず、挾帶挾路。
錯然なるときんば吉なり、犯忤すべからず、天真にして妙なり、迷悟に屬せず。
因縁時節、寂然として照著す、細には無間に入り、大には方所を絶す。
毫忽の差、律呂に應ぜず、今頓漸有り、宗趣を立するに縁て。
宗趣分る、即ち是れ規矩なり、宗通じ趣極るも、眞常流注。
外寂に内搖くは、繋げる駒、伏せる鼠、先聖之を悲しんで、法の檀度と爲る。
其の顛倒に随つて、緇を以て素と爲す、顛倒想滅すれば、肯心自ら許す。
古轍に合わんと要せば、請う前古を觀ぜよ、佛道を成ずるに垂として、十劫樹を觀ず。
虎の缺たるが如く、馬の鼻の如し、下劣有るを以て、羈几珍御。
驚異有るを以て、鷲奴白牯、羿は巧力を以て、射て百歩に中つ。
箭鋒相値う、巧力何ぞ預らん、木人方に歌い、石女起て舞う。
情識の到るに非ず、寧ろ思慮を容れんや、臣は君に奉し、子は父に順ず。
順ぜざれば孝にあらず、奉せざれば輔に非ず、潜行密用は、愚の如く魯の如し。
只能く相續するを、主中の主と名く。